

《太陽の塔》とは誰か

以前から、万博公園関係のメディアに書いてみたいことが一つあった。それは他でもない、太陽の塔のことである。万博公園で働いている人は、否か応でもあれを毎日のように見るはずなので、ご意見を伺いたいのである。太陽の塔は、日本のサラリーマンの像なのではないか、ということなのだ。

考えてみてほしい。太陽の塔は肩がガツクリと落ちて、お手上げになっっている。かなり疲れている感じがする。お腹のいやーな顔は、腑が煮え繰り返るほど腹が立っっていることを示す。しかしその怒りが顔に出ることはないように、ガツクリと仮面を被っっている。そして背中には、黒い太陽を背負う。これは、彼が「立場」上背負っっている「役」を示す。そして外からは見えないが、足下には地底の太陽が押し込められ、体内には生命の樹がある。本当は生き生きとした人間のはずなのだが、責任を背負って仮面を被っっている、それは解放されない。

もちろん、岡本太郎自身は、こんなことは言っていない。それどころか「万国博に賭けたもの」という文章のなかで、「人間はすべてその姿のまま宇宙にのみち、無邪気に輝いているものなのだ。《太陽の塔》が両手をひろげて、無邪気に突っ立っっている姿は、その象徴のつもりである」と言っっている。しかし、あの無表情な仮面や、お腹の歪んだ顔や、どす黒い背中を見て、そんなことを思う人はいるだろうか。逆に、高度成長に浮か

安富歩

プロフィール
1963年大阪府生まれ。京都大学経済学部卒業後、株式会社住友銀行に勤務。京都大学大学院経済学研究科修士課程に進学。京都大学人文科学研究所助手。97年に博士号を取得。名古屋大学情報文化学助教授。東京大学大学院総合文化研究科助教授等を経て、現在東京大学東洋文化研究所教授。「満洲国」の金融（創文社、日経・経済図書文化賞）など著書多数。

れる日本人の自画像を、万博のど真ん中に立ててみせた、とすれば、それは確かに筋が通っっているように思う。だからこそ人々は、自分たちの姿が描かれてるのを見て、強烈な衝撃をうけたのではなからうか。むしろ同じ文章の別の箇所をこの像は象徴しているように思う。すなわち、

つまり自分が十全に自分ではないのだ。これからますます近代社会が組織化され、システムの網の目が整備されればされるほど、人間はその中の部品にすぎなくなり、全体像、ユニティの感動、威厳を失っってくる。たとえ有能であっても、それはパーツとして優れているのであって、人間の全体像を体现することはないだろう。そして情報化時代になり、コンピュータが進めば進むほど、いよいよ本然の衝動が反映しなくなっってくる。

つまり太陽の塔は、本然の衝動を抑え込み、システムのパーツとして有能さを発揮し、威厳を失いつつ経済的豊かさに引き換えている日本人のありさまを象徴し、同時に、その抑圧を打ち破り、「底ぬけの豊かさ」「ふくよかな、幅のひろい人間的魅力」を回復しよう、という太郎の呼びかけを表現している。全体に膨らんでいて、今にも破裂しそうなのは、その爆発のエネルギーを示している、と思うのである。

月刊 みんぱく

5月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
《太陽の塔》とは誰か
安富歩</p> <p>2 特集 お金を数える
「企業中心主義的思考」へのアンチテーゼ
出口 正之</p> <p>4 お金の数え方の世界的統一
山田 辰己</p> <p>5 貝貨で税金を支払う
深田 淳太郎</p> <p>7 カネを焼く
早川 真悠</p> <p>8 お金の価値を測る物差しがない？
——ジンバブエの監査人が頭を抱えた話
大貫 一</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
撚りをかけて縄をなう。
知恵を絞って竹を活かす
石山 俊</p> | <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
海の死霊とトビウオ漁
秋道 智彌</p> <p>16 新世紀ミュージアム
文字の博物館
菊澤 律子</p> <p>18 シネ倶楽部 M
アート映画が描き出す
バンダラデシュのアイデンティティ
——「オニール・バグチの一日」
南出 和余</p> <p>20 ながなんちゃ
ニホン語かニッポン語か
ジャパン語かジャパニーズ語か
吉岡 乾</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|